

[16\_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館報 :  
16(4)

<https://doi.org/10.15017/19528>

---

出版情報 : 図書館情報. 16 (4), pp.43-52, 1980-12-31. 九州大学附属図書館  
バージョン :  
権利関係 :

九州大学附属図書館報

# 図書館情報

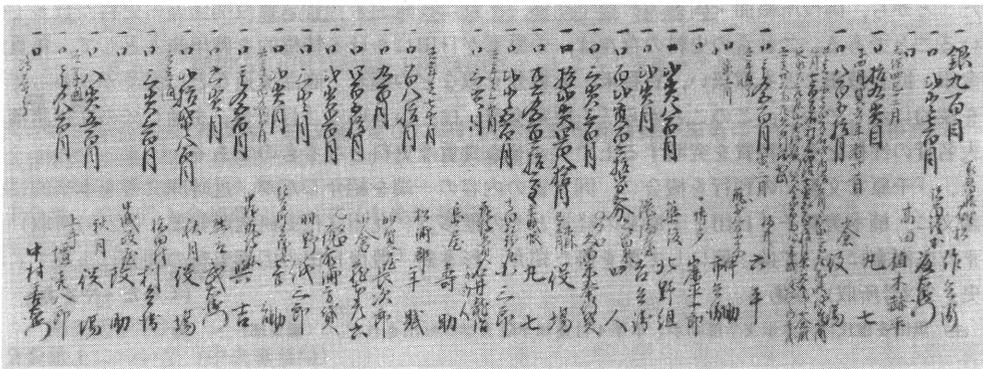
The Kyushu University Library Bulletin

Vol. 16, No. 4 (1980, 10~12)

## 九州文化史研究施設の所蔵史料(三)

— 千原家文書について —

黒田 安雄



東京大学史料編纂所が早くから中世文書の収集・刊行を行っていたこともあって、戦前における九州大学の史料収集の力点は、九州地方の近世史料の収集にあった。その成果が研究機関としての九州文化史研究所の設置となって、現在文学部附属九州文化史研究施設の所蔵する近世史料は30万点を数え、まさに九州近世史料の宝庫の観を呈している。

ところで、九州文化史研究施設は昭和43・44年の両年度にわたり、文部省科学研究費の交付を得て「近世日田とその周辺地域の総合的研究」(代表杉本勲)を行った。この研究は一般に幕藩体制とよばれている江戸時代に、九州天領(=幕府直轄地)の中核的地位を占めていた豊後日田の位置とその役割を、幕政の推移や当時の経済構造の変動のなかで総合的に解明しようと試みたものであった。昭和51年に吉川弘文館より刊行された『九州天領の研究』はその成果を結集したものである。その際、研究活動の一環として、日田の代表的商人であつた広瀬家や千原家などの史料の収集・整理も行い、広瀬家に関しては『広瀬家文書仮目録』(3巻)を作成したが、さらに今度、点数にして3万余点、目録にして延べ1,056頁におよぶ九州文化史研究施設所蔵の「千原家文書」の目録が、『九州文化史研究所所蔵古文書目録』第10・11・12巻として刊行されるに至った。残存する「千原家文書」は、江戸時代の史料が3分の1、あとは明治以降の史料で、前者には證書類が多く、後者には書状類が大部分を占めるが、「千原家文書」中には店卸帳・日記等、江戸時代より明治・大正と長期に亘るものが多い。そこで、目録が刊行されたこの機会を利用して「千原家文書」の内容とその特色の一端を簡単に紹介することにした。

豊後地方は古くから「九州の京都」といわれたように、いわゆる日田盆地を形成して、近世初期以来、交通の要衝であつた。千原家は、系図によれば、中世筑後の有力国人蒲池氏の一族で、天正年間筑後国御井郡千原を領して千原と称し、その後慶長年間に日田に移住して商人になったという。ほぼ信用できる所伝と思われる。農業に従事するかたわら醤油・味噌・酒・油等の醸造・販売に従事し、土地を集積して、

日田有数の商人に成長した。天明年間には特権的な御用商人である郡代の掛屋を務めるほどに大きく発展し、年貢米の徴収や売上銀の保管・廻米の買替役を請負うとともに、魚油・綿実油等の製造にも手を広げ、日田の特産である米・紙・苧・茶・櫛、豊後高田の塩、さらには五島の魚油、玉島の綿等各地の特産物を取扱い、博多・大坂を含んだ広範囲な地域で仲介商業を活発に展開した。九州西部と上方との仲介商業の発達を背景に、商業・高利貸付資本を蓄積した千原家は、代官によって掛屋に任命され、その資本はいわゆる「日田金」として天領内外の農民・町人への貸付から九州諸藩への大名貸へと大きく発展したのである。

以上のような千原家の存在形態からも窺えるように、「千原家文書」には数多くの店卸帳・金銭出入帳・貸借証文等に加えて、酒・醤油・味噌等の醸造・販売関係等の各種商業経営史料、さらには土地集積を示す田畑永代帳・田畑小作帳・質地証文等の土地関係史料が残されている。このように日田における商業・高利貸資本の動向や周辺地域の諸物価の変動を体系的に窺うに足る好箇史料が膨大に、しかも江戸時代の中期から明治に至るまで、長期間にわたりほぼ纏った形で残存しているところに、「千原家文書」の大きな特色がある。

いま一つ注目すべきことは、「千原家文書」には、千原家が広瀬家などとともに、天領日田の掛屋をつとめたことから、御役所帳面・両替等の掛屋関係、それに長崎廻米買替請負役関係等の史料が数多く残されていることである。これらの史料の存在は、千原家が日田における特権的な御用商人として、年貢銀・御用金銀・助合穀銀などを取扱い、買替米・大坂登せ銀などの廻米・商品流通などに深くかかわっていたことを端的に示しており、このことから「千原家文書」は、いわゆる「日田金」を通じての九州諸藩に対する大名貸の性格とその特質を究明する上で欠かせぬ貴重な史料となるものである。

以上、「千原家文書」の刊行を機会に、同文書の内容の一端を紹介したが、近時同文書を本格的に検討した論文に、楠本美智子「日田・千原家の経営とその推移」(『九州文化史研究所紀要』第25号所収)があり、また広瀬家については、簡にして要を得た紹介、杉本勲「豊後日田の広瀬史料の調査によせて」(『日本歴史』272号所収)がある。

(くろだ・やすお)

注) 黒田安雄氏は元本学文学部助手。本年4月愛知学院大学へ転出された。(編集部)

## 石崎文庫 唐話学書二・三 — 第5回展覧資料解説 —

中野三敏

石崎文庫は故石崎又造氏の文庫に命ぜられた名称である。氏は九州筑後に生れ、久しく東京帝国大学附属図書館に司書として勤務される間、日本における唐話学の沿革に関する研究に従事され、「近世日本に於ける支那俗語文学史」(昭和15年 弘文堂刊)と題する名著を公刊された。ここに展示するものは凡てその研究の資として座右に置かれた書物の中から選び出したものばかりである。氏は戦後九州に帰られ、福岡の西、姪の浜愛宕社の麓に一家を構えられ、その地に没されたが、未亡人石崎みつ女史は、その蔵儲の凡てを九州大学へ移譲せられ、この度の展覧となったものである。

尚石崎氏の「近世日本に於ける支那俗語文学史」は既に刊行以来殆んど半世紀を迎えようとしている今日に於いて、なお、この分野に於ける唯一無二の業績であることをここに附記しておく。

### 1 忠義水滸伝 第1—第20 大本4冊 第1—第10迄は享保13年刊、第11—第20迄は宝暦9年刊

本書は李卓吾批評百回本を原本として、それに岡島冠山が訓点を加え、和刻(唐本を日本で翻刻したもの)したもの。第20回迄を享保13年と宝暦9年の2度にわたって翻刻したが、21回以後は未刊に終わった。

底本に用いた李卓吾評本は中国にも数種あって容輿堂本や芥子園本等がしられるが、冠山が用いたのは右の二本とも異なる別本であったようである。冠山は更にこの書の翻訳も企て、おり、それは宝暦7年と寛政2年に47回迄が刊行されている。冠山のこの業績は日本に於ける中国俗語文学の流行の口火を切ったも

のとして有名である。

冠山は長崎の産、その伝の詳細は今以てわからないが、唐話の才能は当時に冠絶しており、宝永末年から江戸で、享保半ばからは京で共にその地に唐話学の端緒を開き享保13年、55才で京に没した。

## 2 忠義水滸伝 第1—第10 大本2冊

本書は1と同じ本であるが、本文に3種の書き入れが施されており、黒は知恩院坊官榎田安房守、朱は風月庄左エ門、藍は陶山南湊の著「水滸伝訳解」の説をそれぞれ記したもの。当時の上方に於ける唐話学者の研鑽ぶりを具体的に示す資料として甚だ貴重である。

風月庄左エ門は京都の本屋風月堂の主人で沢田一斎と称し、天明2年82才で没している。岡白駒に唐話を学び、宝暦以降の京都唐話学界をリードしていた。

榎田安房守は名を直猷といひ、従六位下に任ぜられ天明2年52才で没した。唐話を沢田一斎に学び、白話風の小説「春樹折甲」の著がある。

陶山南湊は伊藤東涯門の唐話学者で「百廿回本水滸伝」の語釈を試み「水滸伝訳解」を刊行した。その生没年は不明であるが一斎よりはや、後輩に当る。

## 3 忠義水滸伝解 第1—第16 小本1冊 陶山南湊著 宝暦7年刊

本書は「百廿回本水滸伝」の語釈を試みたもの。その第1から第16迄が、このような形で刊行された。尚、南湊は「水滸伝訳解」と題するもう一つの語釈も残しており、2に引かれたのは「訳解」の説である。本書は本屋を異にする2種があり、こゝに展示したのはその再摺本に当る。

- |        |         |       |
|--------|---------|-------|
| 4 小説精言 | 半紙本4巻5冊 | 寛保3年刊 |
| 小説奇言   | 半紙本5巻5冊 | 宝暦3年刊 |
| 小説粹言   | 半紙本5巻5冊 | 宝暦8年刊 |

右の三書を一括して「小説三言」とも言う。「精言」「奇言」は何れも岡白駒の著。「粹言」は門弟沢田一斎が業をついだもの。何れも一斎の風月堂から刊行されている。内容は唐土の所謂「三言二拍」即ち馮夢龍編の「喻世明言」「警世通言」「醒世恒言」及び、凌蒙初編の「初刻拍案驚奇」「二刻拍案驚奇」以上5編の短編白話小説集から14話を抄出し句読訓点を施し、傍訓を加えたもの。この和刻三言の出現は、我国の小説界に新風を吹き込み、以後三言に材をとった都賀庭鐘の「英草紙」等の刊行を見て、新しい読本の時代を迎えることになる。

岡白駒は本姓岡部、肥前蓮池候の儒臣。明和4年76才で没する迄、京坂に於ける唐話学の領袖の地位を冠山から受けついで君臨した。

## 5 唐話纂要 半6巻1冊 享保3年刊 岡島冠山著

本書は初め享保元年に江戸で5巻5冊本として刊行され、更に享保3年に巻6「和漢奇談」の1巻を加えて再刊された。ここに展示したのはその再刊本である。

内容は一般的な唐話入門書で同類書の内では江戸時代最も広く読まれたものといえる。著者冠山が徂徠の一門の訳社の為に教科書代りに編んだものであろう。巻1から5までは2字から6字程の語句を分類別に掲出して音及び釈を施し、巻6は2章の小説を白話で記し、後に訳文を附す。この2章の小説は恐らく本邦人の手によって書かれた白話小説の最初のものといえよう。

展示した本書は蔵書印に「可軒池田氏蔵書記」とあって、岡山藩井原の邑主池田可軒の旧蔵本である。可軒は幕末多事の折外国奉行として活躍した異才であった。

## 6 唐話使用 半6巻3冊 享保20年刊 岡島冠山著

本書は初め享保10年に京で刊行され、更に同20年再刊された。展示したのは再刊本である。内容は5と同じく、日用の唐話を列記して四声と訳を施したものの。やはり唐話教科書としてよく用いられたものの一つである。

### 7 俗語解 写本半4冊 沢田一斎編か

小説伝記類の俗語をイロハ分けに配列して注解を加えたもの。注解には引用書名を記した上編者の説を加える。説明は詳細で同類の書の中でも質量ともに抽んでる。引用書目中には「小説奇観」「照世杯」等の稀書も見え、陶山南溟、岡白駒、東涯、徂徠等の言説を引くことが多い。傍もって石崎氏はこの書の編者を一斎かとしておられる。

### 8 小説字彙 小1冊 寛政3年刊 秋水園主人編

小説類からの俗語の集釈で一般の漢和字書と同じく畫引きになっているのが字書としてかなりこなれた感を与えており、唐話学流行の度合いを如実に示している。更に本書の特色は巻頭に附載された「援引書目」の豊富さにあり、実に160種に及ぶ小説類を列記して、その中には未だにその存否未詳のものが少なくない。編者秋水園主人は大坂の畸人高安芦屋かといわれているものの尚明らかではない。

### 9 三字唐話 写, 半1冊 江戸後期写

唐話字書の一。三字の唐話を集め、唐音と釈を附す。巻末には50程の蘭語も記されその内容は医学用語が多いので、本書の編者も医学書生の一人でもあろう。江戸後期における唐話学と蘭語学が基盤を一にすることを図らずも示した好資料であるようにも思われる。

### 10 遊亭社常談 大2巻1冊 明和7年刊 石川金谷著

本書は5の「唐話纂要」等と同じく「遊亭社」なる唐話学の結社の為に作られた教科書の如きもの。上巻に二字、三字話、下巻に長短話、話説を集め音釈を加える。

石川金谷、名は貞、字は太一、伊勢菰野の人、宝暦年間長崎に遊んで唐話に通じ、遊亭社は彼を盟主とする結社であろう。後に延岡藩儒となる。

### 11 雑纂訳解 大本4巻1冊 岡白駒著 宝暦12年刊 式亭三馬旧蔵

唐話学の流行は我国の文芸に多大の影響を与えたが、その見逃してはならぬ一つに支那笑話の翻訳の流行があり、江戸戯作に大きく影響した。本書はその比較的早い年代の一。

唐の李義山作といわれる「雑纂」は短句よく人の肺腑を突く諷刺文芸の傑作と称され、「枕草子」等もその摸倣といわれてもいるが、その訳解を試みたもの。旧蔵者式亭三馬はその著「浮世床」2編に多くの支那笑話を下敷きにした滑稽を点綴しており、本書からも「殺風景」中の「花下曝棍、妓遊説俗事」の2項をかすめとっている。

展示した部分、右の2項に朱点がふってあるのは、三馬の手澤である。

### 12 咲堂福聚 大本1冊 享和4年刊 山本北山著

支那笑話の翻訳は更に進んで、原話の翻案による漢文笑話の創作の流行を見る。

本書はその一で当時儒学の大家山本北山の手になるもの。主として「笑府」「笑林広記」等に材をとって翻案し、間々北山一流の詩文観をも吐露する。

漢文笑話創作は漢文の作文楷梯といった意味で書生間に大流行したものらしい。

### 13 華間笑語 写本半1冊 文化5年序 三村其原著

本書もまた漢文笑話創作の一であるが、その取材範囲はかなり広く「笑府」「笑林広記」等の支那笑話は勿論、更にそれを翻案した本邦人の著作「笑話出思録」「胡廬百転」等を始め、純然たる本邦笑話「昨日は今日の物語」や「醒睡笑」等からも拾っており、又その笑話としての出来栄も優秀なものが多い。三村氏その人については未詳。

### 14 江湖歴覧杜騙新書 半1冊 文政元年刊 石川金谷著か

本書は明の張応兪著の騙術小説「杜騙新書」の中から17話を抜いて和訓を施したもの。原本は大坂の木

村葭葎堂蔵本に拠ったという。明和7年に初板が出、文政元年に再刊された。展示したのは再板本である。また明治になって河原英吉による本書の訳解もある。騙術や詐欺を主題とする小説は裁判物の「棠陰比事」等と共に支那小説の一ジャンルをもなしているが、本邦でも本書等の訓訳を通して親しまれ、馬琴の読本には本書の利用の跡が指摘されてもいる。

**15 日本忠臣蔵 1回—10回 半3冊 文化12年刊 清 鴻濛陳人訳**

本書は別名を「海外奇談」ともいう。内容は浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」を章回小説のスタイルに倣って俗語訳したもの。文化12年に刊行されたが、展示したのは明治になって重版されたものである。

訳者鴻濛陳人は「忠臣蔵」の支那訳を市中に得て補訂したと序に述べるが、恐らくその清人というのは仮称で、序を書いた亀田鵬斎その人の悪戯ではないかといわれている。

浄瑠璃の俗語訳は既に明和に「四鳴蟬」、安永に「阿姑麻伝」が刊行されており、本書の後にも天保に「櫻精伝奇」の刊行を見、明治に入っても「艶華文叢」等がある。

**16 和唐珍解 小本1冊 天明5年刊 唐来参和著**

洒落本はその発生期からして漢文学とは切り離せない関係を有していたが、宝暦明和期には、支那趣味を最も濃厚に漂わせた戯作となって存在していた。本書はその趣味の極まったもので、長崎丸山の遊廓に於いて、唐人が通事を連れて遊ぶ情景をそのまま、一編の主題としたものであり、唐話をそのままに用いている。

**17 通俗孝肅伝 半5巻5冊 明和7年刊 紀瀧淵著**

本書は支那の裁判小説集「龍図公案」の中から短編5種を選んで抄訳したもの。原本を原文のまま・漢文で記して左右に唐音や和訓をつけるのが通常の訓訳本であるが、更にそれを国字に和訳して読み易くしたのを「通俗」ものという読本の下地を作ることになる。従来京坂で刊行されることの多かった通俗ものの流行が漸く江戸へ移行するその口火を切ったのが本書等である。

**18 板橋雑記 半2冊 明和9年刊 清 余澹心著 日本 山崎蘭齋訳**

南京の秦淮は明清の文人が歓を尽した紅灯の巷であるが、そこに生きた明代の名妓の列伝を中心として、その風物を記したのが本書の原本であり、それに大坂の町儒者山崎蘭齋が訓点を施したのが本書である。明和末年といえ、上方における支那趣味が頂点に達した時期であり、その艶麗優美な面のみを摘出した如き本書はその板本としての出来栄も見事で、当時の文人趣味の一典型とでもいえる様な姿である。

本書は洒落本にも大きく影響して好評であったと見え、享和3年、文化11年と板を重ねるが、展示したのはその初板本である。

後年成島柳北は徳川幕府の遺民としての自己を本書著者の余懐による明朝思慕の念と重ね合わせて、有名な「柳橋新誌」を著作することになる。

(なかの・みつとし 文学部助教授)

注) 本文は大学広報No.386にも掲載されている。(編集部)

## 利 用 の 窓

### 医学図書館におけるJOISの導入と利用

#### はじめに

JOISは電算機を使って情報を検索するシステムである。当館でこのシステムを導入して半年余りになった。ここに点検と反省の意味を含めて導入から今日までの経緯をまとめてみた。

#### 導入から講習まで

JOISの導入が具体化したのは、JICSTが福岡市に支所を開設した昭和54年夏以降である。この九州支所開設を契機にして病院地区への導入についての強い要望が研究者から出されるようになった。端末機の設

置場所はいろいろ問題もあったが最終的には情報の提供は図書館の役割であることから分館に設置された。端末設置後、病院地区の利用者を対象に説明会と実習を行ったが参加者は340名をこえた。

### 検 索

次に検索についていくつかの例を挙げてみたい。検索をマニュアルで行う場合は多少の柔軟性があるが電算機は正直で融通がきかない。当初電算機と約束した言葉で質問しないと答えてはくれない。例えば質問事項入力の場合のキーワードは、「JICST 理工学」では JICST シソーラス、「MEDLARS」の場合は MeSH に記載のディスクリプタ(見出し語)を打ちこまねばならない。つまり「小腸」という語は医学辞典では Small intestine とあるがこれをそのまま入力してもシステムからはタグガアリマセンとしか返ってこない。この「小腸」という語は MeSH のディスクリプタでは Intestine, small となっている。キーワードがフリータームであるかディスクリプタであるかはデータベースによって異なるので検索の際注意しなければならない。

次の図はインフルエンザの合併症(特に肺炎)に関する MEDLARS ファイルによる検索例である。

データベース	MEDLARS	NLM-COPYRIGHT
バンゴウ	チクセキ ハンイ	ケンスウ
S ----	( 1980.08 )	20,685 ケン
0 ----	( 1980.01 - 1980.08 )	170,494 ケン
1 ----	( 1979.01 - 1979.12 )	247,281 ケン
2 ----	( 1978.01 - 1978.12 )	247,492 ケン
3 ----	( 1977.01 - 1977.12 )	265,724 ケン
4 ----	( 1976.01 - 1976.12 )	277,346 ケン
5 ----	( 1975.01 - 1975.12 )	224,041 ケン

S: データベース ノ ハンイ ハ ? S,バンゴウ-バンゴウ  
U: 0-3  
S: シツモン オ カイシ シマス 1980.08.21 10:53:25  
データベース MEDLARS ( 1977.01 - 1980.08 ) 930,991 ケン  
カイワ バンゴウ 73

{ 1 } U: CO/INFLUENZA  
S: 186 ケン

{ 2 } U: PNEUMONIA  
S: 2116 ケン

{ 3 } U: 1\*2  
S: 23 ケン

{ 4 } U: L=EN+JA  
S: 12 ケン

{ 5 } U: ¥P S

#001  
TI= SEVERE ILLNESS WITH INFLUENZA B.  
AU= BAINE WB; LUBY JP; MARTIN SM  
JN= 0002-9343, AM J MED  
VN= VOL.68, IPS.2, PAGE.181-9, 80  
CI= ( ) ( ) (EN ) ( )

#002  
TI= INFLUENZA IMMUNIZATION: THE U. S. EXPERIENCE.  
AU= HINMAN AR; SCHONBERGER LB; RETAILLIAU HF  
JN= 0301-5149, DEV BIOL STAND  
VN= VOL.43, PAGE.223-30, 79  
CI= ( ) ( ) (EN ) ( )

する英語又は日本語で書かれたものを分単位で検索することができるのである。これはマニュアルと機械との機能的な差であり機械検索の大きな利点であろう。

### おわりに

昭和56年4月からはJOIS-IIシステムへ移行する予定である。コマンドも増え文献複写機能もつくという(JICST理工学及びJICSTクリアリング)。DIALOG等大型データベース要望も高まっており、文献の機械検索は今後更に図書館業務の中に大きく位置づけられるであろう。又、当然の結果として原報の迅速な入手が必要とされるが、欧文誌については「自然科学系拠点図書館外国雑誌目録」の刊行や「学術雑誌総合目録」の統合版の刊行予定など全国レベルで資料の共同利用を推進する体制が着々と整いつつあることは大変心強い。なお、現在までの利用状況は次の通りである。

ファイル名	月	4	5	6	7	8	9	10
JICST理工学		1	1			2	4	1
C A S		4	2	10	4	5	5	
MEDLARS		102	91	133	98	104	184	128
TOXLINE		2	3			3	2	
CLEARING								
S S I E								
合 計		109	97	143	102	114	195	129

(医学分館参考調査掛)

## 学 内 マ イ ク

### 国内逐次刊行物（和文）のデータベース作成について

#### 一 中央図書館 一

中央図書館では、昭和56年から稼動する図書館業務の機械化システムに本学所蔵の国内逐次刊行物（和文）の書誌及び所蔵データを入力するためのデータシートの提出を各部署に依頼し、その説明会を10月17日に行った。記入は「個別誌名記入方式」を採用した。変遷誌についてはそれぞれ直前・直後のものを記述する。データベースの重要性については今更言を俟つまでもないが、正確な記入がその基礎となるので担当者各位の協力を特に望みたい。

#### 国内逐次刊行物（和文）書誌・所蔵データ作成スケジュール

データ整理項目	データシート提出期限	登録処理期間	稼動予定時期	備 考
1. 購入分カレント誌 (書誌調査)	昭和55年11月末日	昭和56年2～3月 (書誌の登録・登録レコードの登録)	昭和56年4月	
2. 寄贈・交換分カレント誌 (書誌調査)	昭和55年12月末日	昭和56年4～5月 (書誌の登録・登録レコードの登録)	昭和56年6月	
3. 購入分カレント誌 (変遷調査)	昭和56年6月末日	昭和56年10～11月 (書誌登録)		1.のデータシートを用いる。
4. 寄贈・交換分カレント誌 (変遷調査)	昭和56年12月末日	昭和57年4～5月 (書誌登録)		2.のデータシートを用いる。
5. 所蔵分（現在受け入れていないもの） (書誌・変遷調査)	昭和57年2月末日	昭和57年6～7月 (書誌登録)	昭和57年8月	
6. 所蔵データ	昭和57年8月末日	昭和57年12月 データ・チェック、 修正(部局担当者)	昭和58年1月	

## ◆ 研 修

## 大学図書館職員講習会に参加して

松 本 孝 文

〈とき：昭和54年11月17日～20日 ところ：京都大学薬学部講堂〉

この講習会は、「大学図書館業務の最新の知識を習得させ、その資質の向上を図る」目的で、文部省が毎年開催しているものである。本年度の講義内容は次の通りであった。

## 第 1 日

大学図書館の使命、大学図書館行政、学術情報システムと大学図書館の展開

## 第 2 日

一次資料の整備：拠点図書館の状況、大型計算機センターにおける情報検索システムの現状、専門職能論

## 第 3 日

全国的所在情報形成の問題、相互協力活動の推進、図書館活動の国際的動向

## 第 4 日

図書館情報大学のねらい、MARC 利用と図書館業務機械化

今回は学術審議会より「今後における学術情報システムの在り方について」の答申(学術月報 Vol. 32, No. 11 掲載)が昭和55年1月に出されたことにより、新しい学術システムの形成に向けて、

- (1) 一次情報の収集整備と提供：学術研究に必要な一次情報を国内に網羅的に収集し、研究者に提供する。その為には、拠点図書館、大型コレクション等による体系的・効率的な収集整備および相互協力活動の推進などサービス機能の改善強化を図る。
- (2) 情報検索システムの確立：コンピューターによる迅速かつ確な検索を図り、全国に散在する情報資源の総合的・効率的利用を図る。
- (3) データベースの形成：我が国独自のデータベースを形成し、国内の学術研究の進展と国際的な学術流通に大きく貢献する。又、各図書館でこのデータベースを利用することにより、整理業務の能率化を図るとともに一次情報の全国的所在情報を形成する。
- (4) 新しい情報専門家の養成：多種多様な学術情報が急激に増大している今日、情報処理・情報管理に携わる高度な情報サービスの専門家が必要とされている。新しい人材養成機関の発展とともに現職者の資質の維持向上を図る。

以上4点を中心に、その現状と問題点、今後の課題等について講義が進められ、おわりに林京大図書館長より、「本講習会を今後の図書館活動に活かし、よりよい方向に向かって第一歩を踏み出す時である」としめくられた。

以上が本講習会の概略である。「新しい学術情報システム」は各大学・研究機関の一次情報を資源共有の考え方から「いつでも・どこでも・だれでも利用しうる」よう、全国的・総合的なネットワークの形成をめざしている。その中心機能を果たすべき大学図書館およびシステムと利用者の接点としての図書館職員は、この新しい流れの中にあって大きな転換を求められているといえよう。

なお、本学からは他に渡辺龍之助(教養部分館閲覧掛)が参加した。

(まつもと・たかふみ：石炭研究資料センター図書室)

## 本学教官著作寄贈図書

## 〈中央図書館〉

長 智男 (農学部)

自然とむすぶ文化 — 訴・自然保護論 —  
共立出版 昭55

小野 勇一 (理学部)

サバンナの生きものたち — 九大エチオ  
ピア学術調査隊の記録 —  
西日本新聞社 昭55

## 〈理学部図書室〉

梶原 壤二 (理学部)

新修解析学  
現代数学社 昭55

新修線形代数

現代数学社 昭55

## ◆ 会 議

## 福岡県・佐賀県大学図書館協議会(昭和55年度) 第1回 福岡地区研究会

〈とき:昭和55年9月30日(火) ところ:福岡女子短期大学図書館〉

この研究会は、加盟館より数名づつ39名が参加して開催された。

刀根淳司書長(西南学院大学図書館)を司会者に選び、従来よく実施される特定の個人による発表や講演といった形でなくあらかじめ掲げられた、研究テーマについて討議し検討しようという、討議する研究会にしたいとの提案が司会者よりあった。

西南学院大学からあらかじめ提出された、下記のテーマについて、司会者より発題の説明がされ、これについて各館より活発な意見が出され討議された。

1. 閲覧業務のあり方と問題点について
2. 九州地区大学図書館協議会および福岡県・佐賀県大学図書館協議会福岡地区加盟館の受入図書実態調査よりみた受入業務について

本館からは福永受入掛長、舟越相互利用掛長、浜崎事務官、益森事務官が出席した。

## 第51回 日本医学図書館協会総会

〈とき:昭和55年10月23日(木)~10月24日(金) ところ:宝塚ホテル〉

## 協 議 題

1. 医学雑誌総合目録(和文編、欧文編)並びに現行医学雑誌所在目録の編集について(中央事務局)
2. 名誉顧問推薦に関する細則(案)について(中央事務局)
3. 名誉顧問推薦の件(中央事務局)
4. 正会員、準会員入会加盟について(中央事務局)
  - (1) 正 会 員  
旭川医科大学図書館
  - (2) 準 会 員  
関東通信病院
5. 会費値上について(中央事務局)
6. 病院図書室を含むネット・ワークの形成について(中央事務局)
7. 次期当番館について(中央事務局)

## 承合事項

機械検索業務について(阪市)

なお、当分館からは、山元分館長、西嶋受入掛長、朝倉参考調査掛長が出席した。

## 図書館業務電算化計画の開発状況についての説明会(中間報告)

〈とき:12月8日(月)~9日(火) ところ:中央図書館視聴覚室〉

図書館業務電算化の開発状況について、「北部九州地区国立大学図書館機械化ネットワーク協議会」構成館の担当者及び本学の「開発班」、「推進班」に対し図書受入業務、図書整理業務、雑誌関係業務及び閲覧関係業務のサブシステムについて開発担当チーフから説明と質疑応答が行われた。特に閲覧関係業務では各大学・各部局に個性があり、それらの調整について活発な意見が交換された。

## 本学教官著作寄贈図書

## ◀医学分館▶

井口 潔 (医学部)

Bed-side memo (外科) 実地医家のための

ノーハウ 井口 潔 監修

世界保健通信社 昭55

癌の免疫化学療法 — 基礎と臨床 —

井口 潔・服部孝雄 共編

南山堂 昭55

鳥巢 要道 (医学部)

癌免疫療法の臨床

ライフサイエンス 昭55

## 九州大学附属図書館商議委員会 (第118回)

〈とき：昭和55年12月11日 ところ：附属図書館視聴覚室〉

## 議 題

1. 学内図書館の今後の在り方について
2. その他

## 報 告

1. 図書館業務電算化の中間報告について
2. 国立七大学図書館協議会について
3. その他

## お 知 ら せ

## 法学部の改装工事はじまる

法学部旧館は昭和29年に建築されたものであるが、このたび建物の全面改装が昭和55年11月～昭和56年3月の予定で行われることになった。この期間中、図書室は法学部新館横の中庭に仮設の建物に移転して業務を行うので、利用者各位に不便をおかけすることになるが、この点充分ご理解頂きご協力をお願いしたい。  
(法学部図書掛)

## 就職関係資料コーナーを新設

中央図書館では、本年12月からブラウジング・ルームに就職関係の資料約100点を備え付けて「就職関係コーナー」を新設した。学生の就職の指針として活発な利用を期待している。

(中央図書館閲覧掛)

## 附属図書館商議委員会委員名簿 (55.12.1 現在)

委員	長員	(文)	館教	長授	塚原博	松永雄	二洋	委 員	(歯)	教 授	勝田信夫	田崎敏男
〃	〃	(〃)	〃	〃	森成	瀬田	悟策	〃	(葉)	〃	川崎正治 <td>嶋素夫 </td>	嶋素夫
〃	〃	(育)	〃	〃	成瀬	前田	重治	〃	(〃)	〃	小嶋柳 <td>高素男 </td>	高素男
〃	〃	(〃)	〃	〃	前田	原島	重義	〃	(工)	〃	高入江 <td>平義宏 </td>	平義宏
〃	〃	(法)	〃	〃	原島	林重	迪廣	〃	(〃)	〃	平嶋圭 <td>屋正造 </td>	屋正造
〃	〃	(〃)	〃	〃	兒玉	川端	正憲	〃	(農)	〃	土中	屋正造
〃	〃	(経)	〃	〃	川端	久夫	夫嗣	〃	(〃)	〃	上村	野清太郎
〃	〃	(理)	〃	〃	松田	博英	夫嗣	〃	(養)	〃	中野	村正則
〃	〃	(〃)	〃	〃	君塚	英男	也英	〃	(〃)	〃	赤柳	崎尚
〃	〃	(医)	〃	〃	山元	遠藤	英也	〃	(総理工)	〃	柳ヶ瀬	永尚
〃	〃	(〃)	〃	〃	遠藤	英也	也英	〃	(〃)	〃	矢永	尚
〃	〃	(歯)	〃	〃	高濱	靖	英	〃	(温)	〃	宮武	尚
〃	〃	(〃)	〃	〃	高濱	靖	英	〃	(生)	〃	宮武	尚

## ◆ 日 録

会 議 等	岡地区研究会	於福岡女子短期大学
10.21～24 九州地区国立学校等係長研修会	於佐賀青年の家	
29・30 国立大学附属図書館事務部長会議	於熊本大学	
12.2 福岡県・佐賀県大学図書館協議会	第2回福	
	岡地区研究会	於福岡女子短期大学
	12.8 図書系掛長研修会	
	8～9 「図書館業務電算化」開発連絡小委員会	
	11 商議委員会 (第118回)	
	17 図書館運営委員会 (中央図書館・理学部・農学部)	

編集委員 主査・長谷川 信彦 委員・花田 洋子, 原 一義, 岸本 澄夫, 舟越 俊允(中央図書館), 出島 照義(医学分館), 伊藤 繁行(教養部分館), 友納 昭二(経済), 三嶋 博義(工)

九州大学図書館報「図書館情報」Vol. 16, No. 4 (通巻120)

1980年12月31日発行・発行人 沙 藤 隆 茂

発行所 九州大学附属図書館・福岡市東区箱崎6丁目10番1号・〒811②・電話代表(641)1101 内線2454